

[書評] デヴィッド・グレーバー、デヴィッド・ウエングロウ著、酒井隆史訳  
『万物の黎明——人類史を根本からくつがえす』  
(光文社、2023年9月刊行、5,500円(税込))

石村 智  
(国立文化財機構 東京文化財研究所)

本書はここ数年のポピュラー・サイエンスの中でも、まぎれのないベストセラーと言えるだろう。マスコミにも「本書は人類の歴史についてこれまで信じてきたことをすべて爆破させる爆弾だ」「この三十年間で読んだ本の中で、最も深遠でエキサイティングな本だ」「グレーバーとウエングロウは、ガリレオとダーウィンがそれぞれ天文学と生物学になしたことを、人類学でおこなったのである」などといった最大限の賛辞が並ぶ。「人類史を根本からくつがえす」という副題から、ユヴェル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』やジャレド・ダイヤモンドの『銃・病原菌・鉄』といったいわゆるビッグ・ヒストリーの著作を思い浮かべさせるが、本書はこれらの先達を、ホップスやルソーといった啓蒙時代に始まった社会の発展段階論の焼き直しに過ぎないと喝破する。

つまりこれまで人類史を描いた著作のほとんどは、私たちが暮らすこの現代の社会が成立したのは歴史の必然であるという結論にことごとくつながっている。しかし考古学的な証拠や民族誌の事例をひもとくと、社会が段階的に発展していくことは決して一般的な事象ではない。幸か不幸か私たち人類の歴史はこの現代社会に行き着いたが、それによって私たちはかつて享受していた自由を失い、かえって窮屈な生活を送っているのだというのが、本書の著者らの主張である。

そのことを裏付けるための膨大な事例が本書には収められている。例えば最初にヨーロッパ人と接触した時期のアメリカ大陸の先住民は、ヨーロッパ人の文明を優れたものとはぜんぜん認識しておらず、むしろ不自由なヨーロッパ文明よりも自由にあふれた自分たちの社会の方がはるかに幸福であるとすら認識していた。さらには一般的には近代のヨーロッパの啓蒙思想の中で生まれたとされる自由や平等という考え方自体が、彼ら先住民の考え方から借用したものである可能性すら示している(第2章)。

またこれまでの人類史においては、社会は段階的に発展すると一般的に考えられてきており、例えば20世紀の考古学者ゴードン・チャイルドが示した「農耕革命(新石器革命)」「都市革命」のモデルは、農耕の開始や都市の成立が社会の複雑化をうながし、ついには国家の形成にいたるというものであった。しかし近年の考古学的証拠は必ずしもそれを裏付けない。例えば野生穀物の栽培は一万年前にさかのぼるにもかかわらず、農耕が始まるのはそれから3000年も後のことである。これは技術の未熟さによるものではなく、そもそも穀物の栽培に生業のすべてを依存することへのためらい

や拒絶があったのではないだろうか（第 6 章）。またメソポタミアでは紀元前 3300 年頃に初期の都市国家ウルクが築かれ、チグリス・ユーフラテス文明の形成につながっていくが、それをさかのぼる紀元前 4100 年頃のウクライナのステップ地域に「メガサイト」と呼ばれる巨大集落が出現し、数百年にわたって存続するが、そこには神殿や宮殿のようなモニュメントはまったく存在せず、社会の階層化も起こらずに国家を形成することもなかった。あたかもそれを拒んだように（第 8 章）。

本書のこのような要点を紹介すると、読者はきっとピエール・クラストルの『国家に抗する社会』を思い起こすことだろう。実際、本書ではクラストルがたびたび言及され、その影響下にあることがうかがえる。

ここで本書の著者らについて紹介したい。

デヴィッド・グレーバー（1961-2020）は人類学者。もともとの専門フィールドはマダガスカルであるが、『負債論－貨幣と暴力の 5000 年』（2011 年、邦訳は 2016 年）、『官僚制のユートピア－テクノロジー、構造的愚かさ、リベラリズムの鉄則』（2015 年、邦訳は 2017 年）、『ブルシット・ジョブ－クソどうでもいい仕事の理論』（2018 年、邦訳は 2020 年）などの著作を精力的に出す一方、2011 年の「ウォール街を占拠せよ」運動では指導的な役割を果たすなど、活動家としての顔を持つ。その思想の根本はアナキズムで、国家、官僚制、資本主義といったものに対する痛烈な批判を繰り返してきた。

デヴィッド・ウェングロウ（1972-）は考古学者。西アジアとエジプトが専門で、邦訳はないが『What Makes Civilization? The Ancient Near East and the Future of the West（何が文明を作るのか？－古代近東と西洋の未来）』（2011 年）などの著作がある。

本書はこの二人の共著であるが、おそらく骨子をグレーバーが作り、考古学的データによる肉付けをウェングロウが行ったと見受けられる。そして本書の主張にはグレーバーの思想が大きく反映されていると推測されることから、以下ではグレーバーの学問的な背景を深掘りしてみたい。

グレーバーはシカゴ大学でマーシャル・サーリンズの指導を受け、1996 年に博士の学位を取得している。サーリンズとは共著で『On Kings（王たちについて）』（2017 年）を出していることから、サーリンズがグレーバーの学問や思想に大きな影響を与えているのは間違いないだろう。サーリンズの学問の方向性は多岐に及んでいるが、中でも本書に関連が深いと考えられるのが「原初の豊かな社会（original affluent society）」論であろう（第 4 章）。これは 1966 年にシカゴ大学で開催された有名な「マン・ザ・ハンター」シンポジウムで発表された論である。それまでの一般的な見方では、狩猟採集民はいつも貧しくて飢えており、手に取ったものをそのまま口に運ぶような「その日暮らし（ハンド・トゥ・マウス）」を送っているとされていた。ところが多くの狩猟採集民は、一日に二時間から四時間程度を食料獲得の「仕事」に充て、それ以外の時間は余暇と遊びに充てて不自由のない生活をしていることをサーリンズは指摘した。

またサーリンズは前述のクラストルとも親しく、サーリンズが1968年にパリに遊学した際、毎日クラストルとカフェで議論を交わし、1968年5月の五月革命では二人も熱心に参加したというエピソードが、本書でも紹介されている(153頁)。

グレーバーが受けた、サーリンズからの直接的な影響、そしてクラストルからの間接的な影響が、本書に反映されているのは間違いないだろう。そうした見地からするとマスコミによる、本書を革命的と評する過度な賛辞は、やはり適切ではないだろう。むしろサーリンズやクラストルからの学問の系譜の連続性をとらえることこそ、本書の正しい評価につながるものと評者は考える。

しかしそうだとするなら、やや不審に思うことがある。それは本書におけるオセアニアの扱いの少なさである。オセアニアの歴史について具体的に触れた箇所は302頁から303頁にかけての記述のみであり、他にはオセアニアの民族誌の事例などがいくつかの箇所で参照されているに過ぎない。このことはサーリンズの専門フィールドがオセアニアであることからすると不自然である。グレーバーは師であるサーリンズのフィールドに言及することを憚ったのだろうか？ それとも考古学的データを提供する役割のウエングロウが、オセアニア考古学の現状について通曉していなかったのだろうか？

それはともかく、オセアニアが専門である評者からしてみると、本書の骨子を補強する考古学のおよび民族誌的データはオセアニアには豊富に存在すると考えている。例えばメラネシアのビッグマン社会においては、有力者(ビッグマン)は気前の良さが求められるため、富を得てもすぐにそれを惜しげなく他人に分け与えなければならない。そのためビッグマンは、威信はあるが財産を築くことが出来ず、結果として権力の集中が起こりにくい社会となっている。

またポリネシアのサモアは首長制社会であるが、首長(マタイ)たちの権力は極めて限定的だ。コミュニティの合意形成はマタイたちの会議によって成され、マタイの間には保持する称号(タイトル)によって上下関係がある。しかしその上下関係も一方が他方を支配するようなものではなく、権威の差に過ぎない。サモアの社会にもファアラベラベと呼ばれる贈与交換の競争があり、マタイたちは自身の権威にかけて気前よく富を手放さなければならない。結果として、卓越した権力を持つ首長が現れにくくなっている。

こうしたオセアニアの事例は、本書の骨子を補強する格好の材料になると評者は考える。しかし一方で、こうしたオセアニアの事情に通じた研究者にとっては、マスコミが喧伝するほど本書が革命的なものであるという印象は受けないかもしれない。事実、評者はそのように感じた。やや僭越な言い方が許されるなら、本書が主張する内容はオセアニア研究者にとっては「すでに知っていたこと」とであると言える。

しかし評者は逆に、そのことに対して危機意識を抱いた。すなわち私たちオセアニア研究者が「すでに知っていたこと」は、必ずしも一般の読者にとってはそうではな

かったのである。これは私たちが、自分たちが知っていることを一般の人たちに伝えることに成功していなかったことを意味する。

もちろん私たちは自身の研究成果を様々な形で公表し、社会に還元してきたはずだ。しかしその多くは一般の人たちが手に取りにくい研究書であったり、アクセスしにくいシンポジウムであったりしたのもまた事実だ。また最近では大学生くらいの読者層をターゲットにした、オセアニア研究の入門書もいくつか刊行されている。これもオセアニアに関心を持った人たちにとっては効果的であることは間違いないが、オセアニアにはなから興味を持ったことのない人たちに届けるのはなかなか難しい。

そうした意味で私たちオセアニア研究者は、多くの人たちへのアウトリーチ（興味・関心のない人たちへの積極的な働きかけ）を行うことが必要だと評者は感じた。本書『万物の黎明』のようなベストセラーを書き上げるのはもちろん難しいが、少なくとも他地域、他分野の研究者にインパクトを与えるような発信を行うことは十分可能であるし、そのためには他地域、他分野の研究者たちが普段どのようなことを議論しているのかを知ることは重要である。その意味でも、オセアニア研究者にこそ本書『万物の黎明』を手にとって頂きたいと、評者は考えている。